



## 特集

# 「防災」を考える

## この「町」・この「瞳」を守るために

「見返りを求めず、地域や隣人を助ける心」

― 近助のすすめ

富士見町には、5千7百余りの世帯の方が暮らしています。しかし、残念ながらその約4分の1にあたる千三百余りの世帯の方が集落に加入していないという時代となっていました。隣人や町に対する絆が薄れました。このままでは人と人の温もりや思いやりの心さえ忘れ去られるのではないかと懸念されています。現在起きている高齢者の所在不明や幼児虐待、孤独死など様々な問題の原点は、この「絆の欠落」にあると考えられています。

昭和60年頃からでしょうか。「災害弱者」という言葉が使われるようになりました。そのきっかけとなったのは、日本各地で高齢者や障害者が犠牲となる災害が頻繁に起こったことにあります。それまで私たちが取り組んできた防災対策は、いわゆる健常者、すなわち自分の目で見る、耳で聞き、理解や判断をし、自ら行動する身体的能力を持つ人を前提とした対策に偏っていました。これらの経験を通じてあらためて、自らの命を自ら守ることができない人たち

への、防災対策の必要性を痛感することとなりました。

被災地にいる全ての人たちが越えなければならぬ壁が3つあると言われています。一つ目は「災害から命を守ること」。二つ目は「生き残った人たちのその後の生活を維持すること」。そして三つ目は「災害後の新たな暮らしを再建すること」です。「災害弱者」の問題がクローズアップされた当初は、突発災害からどのように弱者の命を守るかに主眼が置かれていました。しかし、この「越えなければならぬ壁」は必ずしも、身体的あるいは知的なハンディキャップを有する人のみが該当するわけではないことが明らかになったのです。

阪神・淡路大震災のとき、建物の下敷きになるなどした自力脱出困難者約3万5千人のうち、77%は家族、近隣住民によって助け出されました。自衛隊、消防、警察などの防災関係者による生存者救出は19%でしかありません。それに、直ちに全ての被災住宅に自衛隊、消防、警察が駆け付けられるわけでもありません。



救急隊員による患者搬送訓練  
(富士見消防署前)



消防団員による救急訓練



病院内へ患者搬送後、病院スタッフ  
による訓練



消火器を実際に使用した  
初期消火の訓練

この震災で亡くなった人のうち約8割は、地震発生後14分以内に死亡していたとの調査結果があります。つまり、早く助けなければ助からない人たちがいるのです。頼りは向こう三軒両隣の隣保共助であり、地域の一人ひとりがそれを理解し認識することが「近助の精神」と言えます。従来から地域防災の基本は「自助」・「共助」・「公助」とされてきました。共助は自主防災会へと発展しましたが、その自主防災会の核をなすのが向こう三軒両隣のコミュニティ、つまり「自助」と「共助」の間を埋める「近助」なのです。自分のことを気遣ってくれる顔見知りや地域の中にどれだけ存在しているか、言い換えれば日常生活の中で地域に暮らす人たちとどのようなコミュニケーションを培ってきたかが、重要となります。

生命の危機が去り、生き残った被災者の生活を守る局面において重要なことも地域コミュニティの「共助」の力です。避難所の中で車椅子を利用する人や、障害者を誘導する避難者の方たちの姿を目にすることがあります。潜在的なハンディキャップがあることは確かに防災上、大きな障害となりますが、周りにいる人たちの働きかけにより、ハンディキャップを軽くすることは十分に可能なことなのです。

震災後に仮設住宅へ入居されている方が、その後の復興生活になじめず、特に高齢者の孤独死の問題が表面化

しました。被災者の方が喪失感の中から立ち上がるためには、家族や地域コミュニティ、多くの人たちの力や「人間の力」が大切な役割を果たします。くらしの再建を図っていくためには、様々なコミュニティと積極的にかかわり、自ら努力して人と人とのつながりを保ち続けることが必要なのです。

「自然」や「災害」は様々な顔を見せません。いつ、誰が、「災害弱者」になってしまいか分かりません。しかし、どのような状況下にあっても弱者を出さない、弱者を守る、この最も大きな力は、やはり地域コミュニティ以外にはありません。

安全・安心は行政の仕事などと、他力本願では済まないことは阪神・淡路大震災で実証済です。本当の安全は誰かに与えてもらうものではなく、自らが努力してこそ得られるものなのです。といっても、一人だけの自助努力には限界があります。地域ぐるみ様々な人たちの協力も必要です。みんなが理解し意識が高まれば地域の活性化も生れてきます。防災会リーダーの皆さんには、粘り強く時間をかけて推進をお願いしたいと思います。

家族や地域コミュニティ、多くの人たちの力や「人間の力」。これらは、子どもが父親の背中に守られている安心感と、母親の優しい笑顔に抱きしめられている温かさが、原点ではないでしょうか。